

関係からみた^{連載}子どもの こころと育ち

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授

母親に抱かれることを嫌がる乳児

ある日、小児科の開業医の紹介で一組の乳児(1歳0カ月、B男)親子が筆者の外来を受診した。母親は子育てにずいぶんと疲れている様子であり、子どもが泣いてばかりであやしても笑わない、抱くとのけぞるのでとても抱きづらい、目を合わせようとする視線をそらす、人見知りが激しく他人を寄せつけない、と心配していた。これまでの経過の概要は以下のとおりであった。

両親とB男の3人家族。吸引分娩で出産したが、出生時仮死状態だった。母親が母乳をやろうとすると、のけぞってしまい、母親がそれでもあげようとして手を添えようと、その手を振り払ってしまうほどであった。あやしかけようと顔を向けると、目をそらしていた。そのためB男は母親に甘えることがほとんどなかった。B男はよく泣き、どうか母乳を飲んだあと泣き続けることが多かった。あやしても笑わない。このようなことが重なり、母親は育児に疲れる毎日だという。

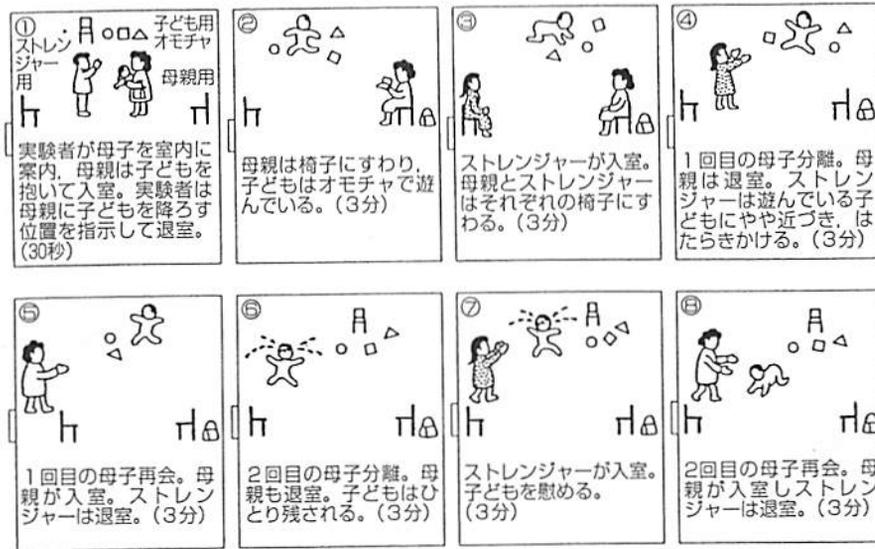
生後5カ月、指しゃぶりが始まる。指しゃぶりによって泣き叫ぶことは減った。抱かれることを嫌がり、抱かれてものけぞってすぐに降りることが多かった。そのため、一人で横にしておくと、指しゃぶりをして寝てしまうことも少なくなかった。それでも夜中に30分から1時間おきに起きては激しい泣きを繰り返していた。子どもの多い場所へ連れていくと嫌がって泣いていた。そのため母親は、自分と同じような育児仲間と一緒に過ごすことがなかなかできなかった。最近やっと歩き始めたばかり。真似をまったくしようしない。人見知りが激しく、周囲に対して用心深く、刺激に過敏なところが目立っていた。初回面接で母親は「これまでこの子を赤ちゃんらしく感じたことがない」とまで語るほどであった。

新奇場面法(SSP)によるアタッチメント・タイプの評価

今日、こんな親子の例は少なくないことが小児科医の口からよく語られる。筆者はこれまで、このように親子の関係がうまくいかないと訴える事例に多数出会ってきた。このような親子を前に

したとき、まず大切なことは、そこに実際どのような関係の難しさがあるのかをしっかりとこの目で確かめることである。そのために筆者が実践してきた方法は新奇場面法(Strange Situation Procedure: SSP)である。これは、いまでは世界中の多くの乳幼児精神保健研究者たちが使用しているもので、子どものアタッチメント・タイプを評価するための一つの心理学的実験方法である。具体的には親子が自由に遊べる空間を用い、図1に示すよう





(繁多進：愛着の発達：母と子の結びつき、大日本図書、東京、1987、p.79、より引用)

図1 新奇場面法

表1 各アタッチメント・タイプの行動特徴

	新奇場面法における子どもの行動特徴
Aタイプ (回避型)	養育者との分離に際し、泣いたり混乱を示すということがほとんどない。再会時には、養育者から目をそらしたり、明らかに養育者を避けようとしたりする行動がみられる。養育者が抱っこしようとしても子どものほうから抱きつくことはなく、養育者が抱っこするのをやめてもそれに対して抵抗を示したりはしない。養育者を安全基地として実験室内の探索を行うことがあまりみられない(養育者とはかかわりなく行動することが相対的に多い)。
Bタイプ (安定型)	分離時に多少の泣きや混乱を示すが、養育者との再会時には積極的な身体接触を求め、容易に静穏化する。実験全般にわたって養育者や実験者には肯定的感情や態度をみせることが多く、養育者との分離時にも実験者からの慰めを受け入れることができる。また、養育者を安全基地として、積極的に探索活動を行うことができる。
Cタイプ (アンビバレント型)	分離時に非常に強い不安や混乱を示す。再会時には養育者に身体接触を求めていくが、その一方で怒りながら養育者を激しく叩いたりする(近接と怒りに満ちた抵抗という両面的な側面が認められる)。全般的に行動が不安定で随所に用心深い態度がみられ、養育者を安全基地として、安心して探索活動を行うことがあまりない(養育者に執拗にくっついていようとするものが相対的に多い)。
Dタイプ (無秩序・無方向型)	近接と回避という本来ならば両立しない行動が同時(例えば顔をそむけながら養育者に近づこうとする)に、あるいは継時的(例えば養育者にしがみついたかと思うとすぐに床に倒れ込んだりする)にみられる。また、不自然にぎこちない動きを示したり、タイミングのずれた場違いな行動や表情をみせたりする。さらに、突然すくんでしまったりうつろな表情を浮かべつじつと固まって動かなくなってしまうようなことがある。総じてどこへ行きたいのか、何をしたいのかが読みづらい。時折、養育者の存在におびえているような素振りをみせることがあり、むしろ初めて出会う実験者などにより自然で親しげな態度をとるようなことも少なくない。

(遠藤利彦：アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する。数井みゆき、遠藤利彦・編、アタッチメントと臨床領域、ミネルヴァ書房、京都、2007、p.22、より引用・一部改変)

な手続きを踏んで、人工的に母子の分離と再会を2回実施する。分離と再会の場面で子どもが母親に対してどのようなアタッチメント行動をとるかを観察し評価する。その際の評価基準が表1である。アタッチメントとは「心細くなったり、危険を感じたとき、特定の対象に近接し、それを維持することで安心感を得るとい

傾性」を意味し、それを求める行動をアタッチメント行動という。一般的に多くの場合、Bタイプ(安定型)を示すが、被虐待体験をもつ子どもではDタイプ(無秩序・無方向型)を示すことが多いとされている。

このようにSSPは子どもが母親に示すアタッチメント行動に

焦点を当てているが、筆者はそれに加えて母子のかかわり合いそのものにも重点を置いて観察するように心がけている。子どもと母親各々の行動のみならず、両者の間にどのような雰囲気や関係が生まれ、母子各々がどのように反応し合っているかを克明に観察するのである。子どものアタッチメント行動の質は、子どもの要因のみによって規定されているわけではなく、養育者のさまざまな思いやかかわりが大きく関与していると考えられるからである。

SSP でみられたB男のアタッチメント行動の特徴

B男親子の SSP で認められた母子分離と再会場面でのかかわり合いの様子は次のようであった。

母親は不安と緊張のためか、どこかぎこちない動きである。B男は他者(実験者)を食い入るようにじっと見つめ、強い警戒的な構えをみせている。B男が何かで遊んでいても、他者の動きに注意が吸い寄せられるようにして目で追いかけてしまう。母親はB男に挨拶を促し、さかんに頭を撫でて褒め、周囲に対する強い気遣いをみせている。その一方で、B男にボールが当たって痛そうな場面で、母親はB男を慰めるような行動をとらず、B男も痛そうな反応を表立ってはみせない。

母子分離時、母親の退室にすぐに気づくが、不安そうな仕草を見せることはなく、ストレンジャー(ST)に愛想笑いさえ浮かべる。しかし、いざSTが相手をしようと手を差し伸べて接近すると、緊張が高まったのか不安そうな表情になる。STが玩具を見せようとすると、それまで懸命に我慢していたのか堰を切ったように激しく泣き始める。STが慰めようとしてもずっと泣き続ける。母親との再会時、母親はすぐにB男を抱いて、しきりに「ごめんね」と言いながら頭を撫でて、B男の顔を覗き込んでいる。B男は抱かれたそうだが、いざ抱っこされると、左手で自分の指をしゃぶり泣き止み、右手を母親の胸の前に置いて身体的密着を避け、むずがり降りてしまう。

B男の母親に対するアタッチメント行動には非常にアンビバレントな特徴が認められるが、アタッチメント・タイプはAタイプといえようか。このようなB男の母親に対する態度には、母親に対して甘えたくても甘えられないという心理状態をみてとることができよう。第1回で取り上げた「甘えをめぐるアンビバレンス」である。このアンビバレンスによって母子間に図2に示すような関係をもたらす。甘えたい気持ちはあるにもかかわらず、いざ相手に近づくと、まるで相手を傷つけるのが怖いのか、相手に傷つ

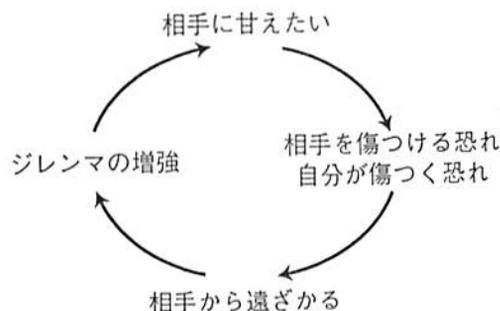


図2 甘えをめぐるアンビバレンス

けられるのを恐れるかのように相手から遠ざかってしまう。そのため子どもは強いジレンマ(葛藤)を抱き、欲求不満は強まっていく。するとますます甘えたい気持ちは強まる。そのため再び相手に近づくが、結局相手から遠ざかってしまう…。このようにして子どもと相手との間に悪循環が生じる。この悪循環は次々に繰り返され、子どもの心的葛藤は雪だるま式に増大の一途を辿っていく。アタッチメント形成に問題を抱えた子どもたちにはこのような甘えをめぐるアンビバレンスが共通して認められるのである¹⁾。

アタッチメントの問題を関係の視点から捉える

このような悪循環の渦の中では、養育者がよかれと思って抱こうとしても子どもは嫌がって離れてしまう。そうかと思って放っておくと相手をしてほしそうな態度をとる。そのため養育者もどうしてよいか強い戸惑いを抱くようになる。このような気持ちを抱きながら養育者は日々子どもにかかわっていくと、そこにさまざまな養育上の難しい問題が生じてくるのである。したがって、アタッチメントに問題を抱える子どもと養育者の問題は、関係という視点から捉えていくことが殊のほか重要になる。

今回は、子どもたちが養育者に対してこのようなアンビバレントな行動をとるのはなぜか、考えてみることにしよう。

●文 献●

- 1) 小林隆児：よくわかる自閉症：「関係発達」からのアプローチ。法研、東京、2008。